

〔個人主義(△粹)の特徴〕:

* 即ち、頁①のプロセス、[さうりたい自己(△粹)⇒手本(C・C')⇒願望(D1)⇒言葉(F:願望的諸概念)⇒型(E)にしたがった行動⇒模倣(D2)⇒それに辻褃を合はせようとする(生甲斐・居心地の良さ・自己満足D3)]を、個人主義(△粹)は、以下プロセスに塗り替へたに過ぎない。

* 近代とは手本喪失。「神の死(絶対全體C喪失)」即ち「神意(宿命D1)喪失」⇒神の代はりに、自己宿命(D1)演出⇒自己主張(自己表現D2)・自由意思(人間いかに生くべき:D2)⇒自己完成(自己主人公C'化・自己C'全體化・自己C'絶対化)⇒自己満足・自己陶醉・自己証明と言ふ似非實在感(D3)。

* オセローの自己劇化、即ち「自分を滅ぼすものの正體(死・全體)をはつきり見きはめ、その上に自分を押しあげ、壯大に祀りあげること、この強烈な個人主義のうちにエリオットはストイズムを見た」(『人間・この劇的なもの』全三P555)。尚、當文は「その上(宿命の上)に自分を押しあげ(自己宿命演出)、壯大に祀りあげること」とも言ひ換へられる。

C(神・全體)・C'(個人・自己)。

* 「その(喪失した神・全體C)上に自分を押しあげ、壯大に祀りあげること(自己C'全體化)、この強烈な個人主義」。

* 神(C)の代はりに自己(C')の手による宿命(D1)演出。つまり、「個人(C')が個人の手で生き方を探求すれば、それはただ全體C的な生き方への反逆に終るだけのことだ」(『人間・この劇的なもの』全三PP572) ⇒ 自己C'全體化。

D1(關係:實在物)・・・神(C)の代はりに自己(C')の手による宿命(D1)演出。

E型(潜在物Fの裏に實在物D1を際立たせる型・Fの「so called」でD1を見せる)・・・自己満足的not so called(Eの至小化)。

* 宿命D1喪失=型E喪失(自己満足的型行動)・・・「(本來)宿命(D1)は人間の側で選びとるものでなく、神々(絶対・全體C)の側から人間に與へるものである。が、もし、個人(C')がそれ(D1)を選びとらねばならぬものなら、その最後の仕上げ(自己満足の型E行動)も個人が自分の手でやつてのけねばならぬといふことになる。かうして、オセロー(C')は最後に自分自身をだまさずには(自己満足的型E行動)、死んでいけなかつたのだ(自己美化)。(かれは)宿命(C⇒D1)にたいして信頼感(D3)をもちえなかつた」(『人間・この劇的なもの』全三P555)。

F(言葉:潜在物)、即ち自己宿命(D1)演出的諸概念(F)・・・

* 「人の生涯は動き回る影」(マクベス)。

* 「愛する事を知らずして愛し過ぎた男の不幸」(オセロー)。

* 「何の因果だ、それを治す役目を引き受けるとは」(ハムレット)。